

石のカタ古墳発掘調査概要

奈良国立文化財研究所
石のカタ古墳見学会資料

1979年1月30・31日

1. 所在地 奈良県奈良市山陵町、京都府相楽郡本滝町
2. 調査目的 日本住宅公団によるニュータウン造成工事に伴う古墳の範囲確認調査
3. 事業主体 日本住宅公団 京都府教育委員会
4. 本古墳に関する従来の研究

石のカタ古墳はその名の由来となった石室が高松塚古墳と同様のいわゆる横口式石室をもつ終末期の古墳として有名である。築造年代は石室の型式から7世紀後半～8世紀初頭に推定づけられている。しかしそのほかには年代を定める手がかりはなく、決の手となる副葬品も石室内が比較的古い時代に盗掘にあつたためかわからず、また何らの伝承もない。大正14年梅原末治博士は本古墳を紹介し盗掘によって大半が埋没した石室の概略図を掲げるとともに、墳形が方墳であること、葺石が存在する可能性があることを指摘した(京都府史蹟勝地調査会報告 第6冊)。昭和43年の「奈良市史」は本墳を径約16m、高さ約2mの円墳として紹介するとともに、梅原報告よりやや詳しい石室の図を載せている(奈良市史考古編)。また奈良県教育委員会による「奈良県の古墳Ⅱ」(昭和49年)は墳丘に関する最近の考之とあるため方形墳であるとした。

5. 今次の調査と成果

今回の調査の目的が古墳の規模を確認することから、従来不詳であった墳丘を実測。その後墳丘の裾まわりに調査の重点をおき、墳丘と周囲にトレンチを設けその構造と規模を確認することにした。その結果、本古墳が周溝をもつ上円下方墳のかたちとすることが判明した。

- a) 立地；南北方向にのびる丘陵の東側緩斜面を利用し、これをコの字形に削りこんで周溝とするとともに、整地に墳丘を築く。
- b) 墳丘；墳丘は2段に築成し、第1段は方形に、第2段は円形に築く。墳丘上面は全面を河原石によって葺く。第1段目の葺石はのこりが多いが第2段目は殆んど溝内に落下している。
- c) 外部施設；墳丘周囲には周溝があく。周溝の中は一定ではなく、西側と北側は約6m、東側は約3m、南側は調査中で不詳である。東側の溝中の狭いのは墳丘の裾と溝との間に約3mのテラス状の張り出しを設けているためである。墳丘の南側中央には礎をつめた排水溝と考之らるる施設がある。南北約3m、東西中0.6m。
- d) 石室；石室は墳丘のほぼ中央に位置する。現在墳丘調査中であり、最終的に実測調査を行き予定である。

